「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第 1 回（6 月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の承諾を得ています。

松井先生からの電話

浙江省 祝鴻平

十数年来、数ヶ月おきに松井先生から電話を頂いている。電話の呼び出し音が鳴って、番号が非通知なら、小学生の息子が私を呼んでくれる。「パパ、きっと松井のおじいちゃんからだよ！」

松井先生のフルネームは松井賢司さんと言い、中学校を定年退職した教師で、今年もう 78 歳の高齢になっているはずだ。松井先生とは、私が 2000 年に「浙江省・静岡県友好交流プロジェクト」で訪日研修に派遣されている時に知り合った。その年この交流プロジェクトを通じて日本へ行った浙江省の研修生は全部で十数人いたが、異なる業界から来たため、日本に到着後はそれぞれ異なる地方の受け入れ先の研修機関に派遣された。私は研修分野が教育だったため、掛川市郊外に位置する静岡県総合教育センターを訪れたのだ。たった一人で言葉でのコミュニケーションもままならず、当初は調子の悪さもひとしおだった。松井先生を始めとする日本の皆さんが私んに少なからぬ関心を持って助けてくれたお陰で、研修生活には割と早く馴染むことができ、一生役に立つような数々の悟りを得ることもできた。

2001 年に私が帰国してから、松井先生は 2～3 ヶ月おきに自宅へ電話をくれるようになった。指折り数えてみると、今年までで 10 年以上にもなる。松井先生の電話はまるで私の生活の一部のようになっている。

電話の内容は、初めの数年は多くが研修と生活でお世話になった静岡県、掛川市のちょっとした変化や、そこで知り合った人々の近況についてだった。教えてくれたのは、「あすなろ」（静岡県総合教育センターの別称）の前の木が伸びたこと、かつての所長が退職されたこと、静岡県空港が着工されたこと、省と県の友好 20 周年記念イベントが催されたこと等々…

先生から電話を頂くたび、研修生活の素晴らしい記憶が甦る。春の安倍川の岸で満開になった桜、夏の時の富士山頂の染みこむような涼しい風、秋の夜の掛川古城に昇る明月、冬の大浜海岸の海に面した温泉…記憶の中の画面は、人を引き付ける古い歌のように、近年事業がままならないため徐々に熱意を失いつつある私の心を潤してくれる。

松井先生の電話の内容には、日常的な挨拶の類も多かった。日本の男性は仕事を重んじる。松井先生は退職して長いにもかかわらず、仕事への関心がやはりとても重要な位置にあるのだ。松井先生が話を聞き終えると、決まって奥さんが「お子さんはお元気？奥さんは？」と尋ねてきた。日本の女性が家庭に関心を持つのも非常に理にかなっている。そうした話が終わると、彼女は決まって私に言い含めるのだ。「祝さん、くれぐれも日本語を忘れないでちょうだいね。あなたが日本語できなかったら私たちとおしゃべりできないんだから！」帰国してからは言語環境がないため、日本語に疎くなり始めた私は赤面した。ご夫妻に電話を頂いたことで、また日本語の本を読む気が湧いてきた。

先生の電話の内容は、たまに少し変化する。当地の中日友好協会の会員として、松井先生は中国人に深い感情を持っているのだ。数年前、浙江省臨安市のある山村の小学生の成長について情況を尋ねられた。後に当地の教育部門を通じて知ったのだが、ご夫妻は中国の希望プロジェクトを通じて、数年間この貧しい児童たちに黙々と資金援助していたのだ。

「5.12」四川省ブン川で巨大地震が発生した翌日の夜、松井先生の電話の声はとても重かった。心を痛めていると繰り返し言っていた。また、その日の午後には募金もしたという。金額はわずか年金 1 ヶ月分だが、被災した中国の人々の助けになれれば、とのことだった。この電話には非常に感慨深いものがあった。この日本のお年寄りは、決して裕福な暮らしでもないのに、これほどの真心で、善意と気持ちを伝えてくれたのだ。彼らの行動に私も深く感動した。職場で被災地向けの募金には協力していたが、翌日には社区を通して僅かながら気持ちを表した。その電話以降、彼らの思想、行為をより深く理解できたように思う。

日本での研修期間中、松井先生の運転で、掛川市から数十キロメートルのとても辺鄙で静かな山村に連れて行ってもらったことがある。私は、魯迅の日本留学当時のある先生の故郷を見学して、野の花の生い茂っている中にそびえ立つ祖先の銅像を仰ぎ見、先人達の国を跨いだ誠実な情誼を追想した。

松井先生とのこうした交流を通じて、私は多くのことに前向きな感覚と認識を得ることができた。こうした面での収穫は、日本での業務研修の収穫に勝るとも劣らない。私はここ数年、研修期間に得られたこうした感覚や認識の実践に努めている。

私の家は浙江大学留学生センターからとても近いので、週末には息子を連れて行って、そこで日本からの留学生がどんな助けを必要としているか見に行くことが多い。

去年「3.11」東日本大震災の発生後、こちらから松井先生に慰問の電話をかけたが、私からの挨拶は、彼からの感謝の言葉に遠く及ばない感じだった。

最近では、今年 2 月に松井先生から電話を頂いている。簡単な挨拶のほか、先生はわざわざ、今年が中日国交正常化 40 周年で、浙江省と静岡県の友好交流 30 周年に当たると教えてくれた。彼は、生きている間、たくさん中日友好のために働くとのことだった。日本人は「大きな話」があまり得意ではないが、この「大きな話」は確かに松井先生の本音であると私には分かる。